

猪名の笹原の笹について

兵庫縣立兵庫高等學校 室 井 綽

百人一首に詠まれた大貳の三位の「有馬山いな笹原風吹けば いでそよ人を忘れやはする」という情緒纏綿たる歌を聴くと、私は直ぐ専門意識が働いて、この女性詩人の流麗な筆に綴られたイナノササは植物學上、どんな笹であつたろうかと考えて見たくなる。

古くより何れの學者も否地方人も皆、此のイナノササを歳暮の市や西宮の十日戎の際に福女の面を結び付けるオカメササ *Shibataea Kumasaca Nakai* であると信じている。このオカメササは他の笹より著しく葉が短く丸い、だから福女の顔に見立てての名である。オカメササは有馬の蟻地獄の邊に少し許り生えていて、むしろ植えていての方が能いかも知れない。此の小さい愛らしい笹をそう遠くない時代に何處からか移し植えたものに相違ない。オカメササを一名ブンゴササと云い、伊藤伊兵衛の地錦鈔（享保二年版）を見ても「此の竹もと豊後國より來る故に名づく」とある通り、本州のものは大抵、野生状をしていても、もともと植えたものが逸出して、それが野性化したものである。それで大貳の三位の平安時代には到底、本州にあり得ない竹である。

そもそもどうした拍子の瓢箪から駒が出てウソが眞になつて此のイナノササがオカメササだと騒ぎ出したかとのイワレ、インネンを尋ねて見ると、其れは明治19年に出版された、日本竹譜の著者、片山直人先生が同書に取り入れたのが初めであるらしい。又同書は田中芳男先生閱として出版した。同先生は明治初年に於ける我邦の物産學の第一人者で文部省の一分課であつた博物局に勤めていた人で晩年には男爵を授けられた方である。そして明治24年には有馬温泉誌を出版した位だから有馬にも調査に御出でになつたものであろう。その時にでも宿屋の主人等に問われ風雅でなく詩藻に乏しい者が思いつきに答えたのが因由であるか、有馬の湯がだんだん有名になつたので一もうけせんがために商人の機智を發揮して有馬名物の一つにイナノササを加え菓子箸を作つて賣らんがために、この僅少の材料にて恰も專賣品の様な考えで作つたものを有馬名物イナノササとして賣つたものに起因するか、何れかを御兩人の誰れかを見て何等詮索もせず、直ちに日本竹譜にもそれを載せたものであろう。イナノササをオカメササだと決定したのは日本竹譜が最初である。我が手許にある本草關係や竹數關係も調べても一向に其の名を釣り出し得ない。若しかかる名が、それ以前にありとすれば内外本草書類の文獻について本邦第一の權威者として誰れもが許す理學博士、故白井光太郎先生の好著、樹木和名考や本草學論攷其の他のオカメササの部に付記しそうなものが見えないから日本竹譜を嚆矢として誰れも異議はないであろう。又竹林翁坪内伊助先生等も同氏の名著で植物研究者が必ず目を通さねばならぬ。此のスタンダードの竹類圖譜や竹類栽培法にも直ちに引用して學界に廣め持て囃したものだ。

イナノササが今のオカメササでないとしたら一體何であろうか、平安時代に笹原とまでうたわれて廣く有名だつた竹種が現在跡方もなく絶えてしまつたとはどうしても考えられない。有馬の地を歩くと有馬の谷一面にスズダケ *Sasamorpha purpurascens Nakai* があり之れに當て笹める可

きが至當かと考えられんもんでもない。

このスズダケは眞に雅味に富んだ程をもつ笹であり、生えて間もないものでも稈は草屋根の中で何年も煤けた様な色をしている。又葉は長大で皮革質の様な立派なもので有馬を中心とした地方でチマキを作り五月の節句等にも團子を包んで御供なんかにもするからオカメササに當てる位なら、この方が余程上位に置かれるに相違ない。今上の様に歌の中のイナノササをスズダケだと爲て見れば、それで不都合はないかと云うとそれは全然歌の意とは合致しない。元來このスズダケと云うのは冬に葉が全然枯死しないから前掲のものや、次の歌の感じ等一つも味わうことは出来ないからである。

見わたせばまじるすすきも霜枯れて緑すくなき猪名の笹原（新拾遺和歌集，土御門院）

有馬山おろす嵐の吹きよせて猪名の笹原もみぢしにけり（夫木和歌集，藤原堅隆）

スズダケは冬になつても一向枯色にならず、緑すくなくも、もみぢ色もしないから、スズダケにもあてはめるわけには行かぬ。では何であろう乎。然らば「有馬山いなさゝはら云々」の歌にあるイナノササは一體何を指しているかと云うとそれは無論ネササ *Pleioblastus Nezasa Muroi* そのものでなければならぬことを強く主張する。これは従來誰一人として氣付かなかつたことである。

此のネササは猪名野即ち六甲山の東麓一帯の平野のみならず、攝津國一帯に自生する笹で、今でさえ見渡す限り一面に茫々と生えているから、昔は人家も殆ど見えぬ淋しい大笹原であつたことだろうし、京からも奈良からも、こゝまで来るのには余程疲れたことで身を切るような寒風が時雨をはこんで、旅衣の袖をぬらし、とぼとぼとネササの道をかきわけて行く旅人の心細さも、まざまざと想像せられるのである。しかもこの一面の笹原が秋から冬にかけてすつかり枯葉となつて風に靡くさまはまことに荒涼索莫たるものであつたであろう。

されば秋から冬の温泉は洵に能いものであるから猪名野を通つて有馬温泉に通い、萬葉以來この笹原を詠んだ歌は少くない。

しなが鳥猪名野を來れば有馬山夕霧たちぬ宿はなくして（萬葉集，卷七，一一四〇）

有馬山みね行く雲に風さえて霰おちくる猪名の笹原（新續古今集，卷五，秋下，法印定爲）

しなが鳥るなのふし原風さえて昆陽の池水氷しにけり（金葉和歌集，卷四，冬歌）

旅衣つま吹く風の寒き夜に宿こそなけれ猪名の笹原（續後拾遺和歌集，卷九）

このネササは關西の原野、山麓に多く生じ、殊に六甲山の南面はこれのみで包まれている。従つて秋から冬にかけては、その枯色が六甲山の山容を變えてしまい、六甲嵐に煽られて一入淋しさを増す光景を呈する。

斯様に六甲、有馬を眺めイナノササを解釋すると其の歌も生き、その歌句も能く實況と合致し何等その間に疑を挟む余地はないことになる。

序に六甲山にあるネササの藪の中に分け入つてその程を見ると、必ず程面に美しい虎斑のあるものを發見するであろう。私は十五六年前に、この斑ある笹を發見して、これに六甲虎斑竹の新和名と *Pleioblastus Nezasa Muroi forma nebulosus Muroi* という學名をつけて公表して置いたことであつた。この竹こそ六甲だけ（竹）に見られるもので、正真正銘の「猪名の笹」でなくてはならぬ。

以上述べたことに就ては、神戸市内には澤山の歌人が居られるから貴様の様な門外漢が無謀にも我が歌壇へ喙を容れることはケシカランことだと御叱りを受けることは覺悟の上の事である。